加茂里山通信

かもさとやまつうしん

平成19年
秋号

発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部
発行責任者・編集長
佐久間眞明

今年もたわわに実った僕たちの米

子供たちが待ちに待った稲刈です

白鳥小

すごい量の稲です。こんなに食べられる？

9月5日、台風接近が心配される中、加茂地区小学校最初の稲刈が行われました。案の定、朝から雨が降り出し、PTAの方々が稲刈の準備を始めた頃とうとう「本降り」になりました。子供達は予定時間まで教室で待機、「今日は無理か・・」と思われた矢先、子供達の出る時間間際にお日さまがパッと顔を出しました。一斉に教室を飛び出した子供達は刈り方の注意を受け、さあ稲刈の始まりです。やる気満々の子供達は勢いよく刈り始め、見る見るうちにはかどって行きます。が、刈った後に稲穂がチラホラ。早速、先生から「稲は落とさない！ちゃんと拾いなさ～い！」と注意が飛び、それからはより丁寧に作業が進められました。

父兄も含め60名余りで行われた刈り取りは、8畝歩程の田んぼも約1時間で終わり、周りのフェンスに「オダ掛け」し、更に掛けきれない稲には鉄棒も大活躍です。

後日の計量によると、取れたお米は5俵半。なかなかの収穫量です。

その後、希望する父兄に10kgずつ販売され、残りが秋の恒例行事である「白鳥っ子祭り」で振舞われます。

（佐久間里山通信員）

オダ掛けにフェンスが大活躍

里見小

コンバイン気持ちイ～

9月26日、すっかり秋めいた風の中で里見小稲刈りの日が来ました。雨が少なかったせいで田んぼは良く乾き、運動靴のまま入れる絶好のコンディションです。

「この夏の猛暑で草刈が大変でした」と話す校長先生は、始まる前に仲川さんと周りの稲だけを刈り、子供達が刈り易いようにしてくれました。

そして間もなく5年生15名が「里見小オリジナルリヤカー」を引いて登場です。まず仲川さんから説明を聞き、2人組みになって刈った稲は5株ずつ束ね、すそを広げて立てて行きます。

今年の5年生は特に仕事が丁寧で、刈取りが綺麗です。それでも15名（近年で最多）いる為40分程度で刈取り終了。

そしてコンバインの出番です。待ちかねた子供達は順番に乗せてもらい大満足。その後「もみ」は例年通り「むしろ」に広げ乾燥します。

こうして出来たお餅は12月1日のマラソン大会の後「大根おろし餅」や「けんちん汁」に入れて振舞われるそうです。美味しそ～。

（佐久間里山通信員）

チームワークもバッチリ

自慢の手作りリヤカー

高滝小

9月28日、清々しい風の吹く中で、高滝小稲刈りが行われました。当初予定した27日は、開始直前の降雨で延期となったので、5年生は、この日は朝から空ばかり見ていました。というのも、今年は稲作体験の中心学年である5年生だけで稲刈りをする計画です。例年は、保護者・地域の方と一緒に全校で稲刈りをしましたが、今年はたった5年生11人で行うのです。身支度もたくましい5年生により、10時半に稲刈り開始です。稲作経験5年目の11人は、それは器用に鎌を使い刈り始め、腰が痛いとやや疲れの出始めた30分頃に刈り終わりました。

高滝小の力強い協力者の杉田さんが、コンバインで刈り取った稲をあっという間に脱穀をしてくれました。

今年の実習田には、公民館側に5年生制作の案山子が立ち、米の生長を見守ってくれました。収穫した米は、バザーでの販売や餅つき・学年の実習の材料に活用されるそうです。（高滝小学校）

頼れる？見張り番で～す

11人じゃいそがしい～！

小湊鉄道沿線花プロジェクト

小湊鉄道の活性化のために沿線を菜の花で一杯にしようと、今年で3年目となる「花プロジェクト」が実施された。朝から小雨が降る中、佐是の直線から鶴舞、高滝、里見、飯給、月崎、大久保、養老渓谷の各駅にボランティアが集まり、種まきに汗を流した。

昨年から40名ほど増えた230名あまりの参加者は作業終了後に養老渓谷の駅前で新米を味わい、交流を深め、春の黄色いじゅうたんに思いを馳せていた。

かわいいトトロの絵が描かれた大久保駅では白鳥小の児童たちが参加する白鳥ファイターズと国本のご婦人方有志が合同で作業にあたり、駅周辺だけでなく県道沿いの草刈から種まきまで行うなど一生懸命の作業となった。白鳥ファイターズは養老渓谷駅周辺の作業も受け持つなど初参加と思えない活躍であった。春にはみんなの地域を思う気持ちで咲いた満開の菜の花を楽しみたいものである。

（大曽根里山通信員）

親子三代が皆で協力です
上総大久保駅にて

養老渓谷駅に集合した
白鳥ファイターズ　ご苦労様！

その家は
フィンランドの
幸福論から。

HONKA
Todays homes.Naturally.

ホンカ　検索

ホンカ房総　太陽工業株式会社
市原市馬立414-1　Tel 0436-95-5641
www.honka-bouso.com

より豊かで快適な
社会環境づくりを目指して

人と環境をどこまでも大切に。実り多き未来へ、
杉田建材は、地域の皆様と共に歩み続けてまいります

杉田建材株式会社

本社ビル
市原支店

本社/〒290-0549 市原市万田野26 TEL0436(96)1311
市原支店/〒290-0023 市原市惣社1-1-22 TEL0436(24)0511
南総支店/〒290-0255 市原市牛久450-1 TEL0436(50)0111
木更津支店/〒292-0065 木更津市吾妻2-7-20 TEL0438(25)4434

加茂米米くらぶだより

耳にたこが出きるほど「今日は熱いですねー」の日々も10月の声を聞き、やっと秋めいてきました。読書の秋、スポーツの秋、食欲の秋と、何をするにも一番よい季節になりました。

例年なら「あかはつ」がすでに採れ、いただいたりするのですが今年はまだお目にかかっていません。栗や柿、さつまいもなどは非常に甘味のあるおいしい出来になっている様なのですが、どうやら私の好きな「一本シメジ」は夏の暑さで不作なのかもしれません。「モクセイ」の匂いもまだ嗅ぐこともありませんし、「あーぶくちゃっちゃ」も山の中に見ることができません。季節が微妙に狂っているのかな？などと思っているそばから10月4日には、高滝湖の湖畔の桜がいっぱい咲いていました。

さてこの時期のスポーツといったら運動会と連想する方々も多いと思います。加茂地区においては、中学校はすでに春に移行していますし、小学校も今年は里見小学校のみとなりました。学校から聞こえる子供達の嬌声や太鼓の音等運動会の練習が感じられないのが残念でたまりません。文科省の方針もあるのでしょうし、子供達をとりまく環境も変わってきているなか仕方ないのかもしれませんが、なんとなく物寂しさを感じているのは私だけではないと思います。

また、少数化にともない運動会そのものが盛り上げに欠ける感じで、数十年前の様にお年寄りから赤ん坊まで老若男女参加するような、そんな運動会が開催されることは二度とこないのでしょうか？市民体育祭と絡めて一緒にやるとか、なんとかならんのかなー。以下、私事で恐縮です。私の次男（1年生）は今加茂中学校剣道部に所属しているのですが、現在3年生が部活動を卒業し実質2年生1人、1年生1人という現状です。新人戦にしろ中学校総体も参加できるのかわかりません。来年度には存続すら危うい現状なのです。現在6年生をおもちの保護者の皆さん、ぜひ剣道部への入部をお子さんに勧めてくださいますようお願い致します。

ぺっぺ語でーす

A「おめーさんひさしぶりだねー、げんきだったかえー」　B「あんつーたって、加茂病院さこねーなっちまったけん、あうこともねーなっちまったなー」　A「おらも、いまは斉藤先生んとこでせわんなってっから、こっちんにゃーめえったんこねーしなー」　B「あんが、これからは郵便局さ民営化っちゅうこっだから、高滝まで年金おろしにこねっばおいねーべー、きたっばお茶でんのでいっがいよ」　A「だけんあんとんねーだよ、大久保ん郵便局はねーなんねえだっちよ」

（戸沢里山通信員）

産直見聞記

10月末新直売所開店！

里見庵直売所

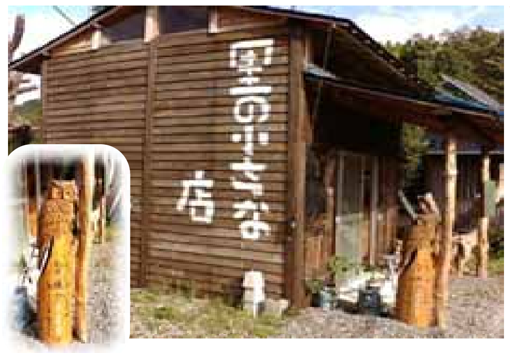
加茂地区にある特産物探しの旅の始まり

加茂地区のメンバーで地域の農業生産物や地域で作られた物、地域にある物、地域で採れる物などを基本に産地直接販売を開始します。

この地域の特徴ある物やアピール出来るものを探し、又は作り出し、それらをより大きく育てて行きたいと考えています。

将来はより多くの人たちが参加できるような組織にして、加茂地区産業振興広場の一助になればと考え、地域にある物を紹介する直売所兼、アンテナショップを左記の日時より開始いたします。

開店日時　平成19年10月27日（土曜日）　午前9時より
場所　田渕旧日竹114
里の小さな店「里見庵」
代表　北見則弘



また新しく、おもしろそうな直売所が
出来ました。その名は「里見庵」
場所は日竹、加茂ヤンマーさんのお向いです
かわいいミミズクのモニュメントがお出迎え

魚屋の戯言（ざれごと）

かに

カニが美味しい季節になりました

これから年末年始にかけてカニを召し上がる機会が多くなると思います。

一口にカニと言ってもその種類は多く、それぞれの楽しみ方があります。一般的によく食べられているのは松葉ガニ、あるいは越前ガニとも呼ばれるズワイガニ、毛ガニ、渡りガニ、タラバガニといったところでしょうか。

でも、今挙げた種類の中にはカニの仲間ではないものがあるんです。実はタラバガニはカニの仲間ではありません。本当はヤドカリの仲間に分類されています。他のカニはハサミを入れて十本の足を持っていますがタラバガニは八本しかありません。「ヤドカリを食べるなんて気持ち悪い」と感じられる読者の方もいらっしゃるかもしれませんが、味は皆様もご存知の通り天下一品ですし、この際あまり深く考えない事にします。

多くの外国でも「カニの王様」と言われて大変に珍重されているこのかには漢字では鱈場蟹と表される通り、鱈の漁場の近くで収獲されています。太い脚にすき間なく詰まった身をほお張って上質の程よく冷えた日本酒で後を追う時、これに過ぎる幸せをあまり知りません。残念なのは時々塩分が強すぎるタラバに出くわす事があります。塩分ばかりは外見からは分かりませんので信頼できる荷主のかにを選ぶようにしています。

毛ガニもまた然り。このカニは脚の美味しさもさることながら甲羅に詰まったミソが絶品です。その濃厚な美味しさときたら比べる事ができるものはあまりないでしょう。この場合、私は迷うことなくぬる燗を所望します。

ズワイガニは蒸したり茹でたりして召し上がる事が多いと思いますが、焼きガニも捨てがたい魅力があります。香ばしく焼かれた脚の身はまさに羽二重のような繊細な味わいで喜ばせてくれることでしょう。相方にはビールか白葡萄酒の出番です。

渡りガニは蒸すか鍋料理がお勧めです。甲羅を下向きにして裏側のすき間に塩を振って蒸し上げて下さい。上に挙げたどのカニよりも値段が手ごろな割りに十分な美味しさを秘めているのも魅力です。

これからの季節、たまには全員が無口になってカニの身をほじってみるのも楽しいのではないでしょうか。

（鈴木里山通信員）

高瀧神社

高滝駅の東側の小高い森（現在、千葉県の天然記念物）の中に鎮座する“高滝神社”は、古くは貞観十年（八六六年）までさかのぼることができますが、現在の高滝神社であるか定かではありません。歴史的には十四世紀の中頃に現在の地に神社が創建された記録は残っています。その後幾多の変遷を経て、享保十二年（一七二七年）に今の社殿に建てかえられました。以来二百八十年、二千有余戸の氏神様として、厚く崇敬されてまいりました。

祭神は玉依姫命、別雷命、邇々芸命の三柱です。安産、子育て、縁結びの神様ですが、無事赤ちゃんが誕生されたお礼として奉納する「底なし袋」は当社独特のもので、大変有難い袋として広く信仰されています。

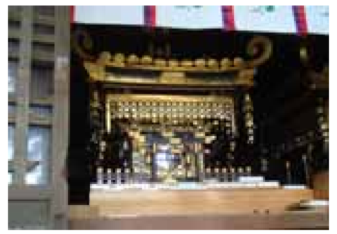
当社のお祭りは春秋の例祭（中西の日前後の日曜日）と八月一日の夏祭りがあります。中でも秋の例大祭には神輿の渡御が行われ、勇壮に練り進みます。ダム湖畔で禊（みそぎ）をして宮入いたします。

神輿渡御の前に流鏑馬（やぶさめ）が行われますが、昔は走る馬から矢を射ったものです。現在はいろいろな事情から、馬を歩かせて矢を射るようになっています。

時代が激しく変化する中にあって、伝統行事を伝えていくことは大変難しいことですが、先人達からの伝統を受け継いで次の時代に伝えていきたいと願っています。

高滝神社宮司　平田　常義

高滝神社本殿



秋の例大祭で渡御される
お神輿は高滝神社
本殿に祀られている

加茂八景

大福山・梅ヶ瀬

みんな行った事あっかい？

晩秋の紅葉で有名な梅ヶ瀬渓谷が注目された歴史は古い。明治19年、陸軍大尉だった日高誠実（ひだかのぶざね）が職を辞して入植し、当地の美しい自然に魅せられ西の月ヶ瀬に並ぶ桃源郷を目指し梅400本を植樹、「梅ヶ瀬」と名付けた。更に「梅ヶ瀬書堂」と称し学問所を開き地域の教育に貢献、優秀な人材を輩出した。今はその面影も無い梅ヶ瀬最深部の「日高邸跡」には碑だけが残り、静寂に包まれて正に喧騒を忘れる空間である。

当時の梅も老木になり、それを見かねた「戸面町会」の皆さんが「南市原応援団」さんの協力を得て昨年末に梅の苗木を植樹しました。数年後には梅の香漂う在りし日の梅ヶ瀬が蘇るでしょう。

梅ヶ瀬と共にハイキングの名所となっている大福山（標高285m）の山頂（とは言え木立に囲まれている）には日本武尊が祀られている「白鳥神社」がある。この「白鳥」の由来はその昔、日本武尊が鹿野山から残敵を追い、道に迷った時に一羽の白い鳥が飛来し道案内をしたと言う伝説によるものであり、現在の白鳥地区の固有名詞のルーツである。明治22年、町村制実施時に現在の白鳥地区10町会が合併し「白鳥村」となった。その名付け親が先の日高誠実と言われている。白鳥神社の秋祭りは毎年11月23日（祝）、境内で神輿が練り歩きます。紅葉を愛でながら是非立ち寄ってみてはいかがでしょう。

【資料提供　相川孝夫氏】（佐久間里山通信員）

情報提供・取材依頼はお近くの通信員へメールでも受け付けます

尚、紙面及び記事に関するご意見・お問い合わせは、市原商工会議所　市原市五井中央西1-22-25
TEL0436(22)4305　担当　北まで
Eメールアドレスは
kita@cci.ichihara.chiba.jp
HPアドレスhttp://www.yo-ro-kadoya.co.jp/kamoseinenbu

次回新年号は1月20日発行予定です

里山からの発信

過疎の問題と里の秋

里の秋

今年の夏もまた暑く、日本がもはや亜熱帯の気候となったと思えました。すでに生物の移動が進んでいるらしく、昆虫なども本来亜熱帯に所属するものが本州でも見受けられるようになってきたということです。

暑さは九月末まで続いたもののようやく涼しくなり、秋らしい気配を感じさせるようになりました。今年は中秋の名月がすっきりと晴れ渡った夜空に見事に映えました。すすきの穂が陽に透けて銀色に光り、稲刈りのあとの田んぼはイネ株に新しい穂が立ち、虫が飛び跳ねています。柿の実も少しずつ色づき始め、栗は実を落とし始めています。里の秋はこれから深まっていきます。

加茂地区にとって将来最大の問題は

深まりつつある秋はまた収穫の秋でもあります。里芋やサツマイモ、白菜や大根、ネギなど煮物や鍋物などに必要なものや、栽培の自然薯なども収穫の時期を迎えます。加茂地区ではこれらの畑仕事や田んぼ仕事をこなしているのは高齢の方が圧倒的に多く、年々高齢化は進んでいます。ただ、まだまだ元気な高齢者が多いのも事実で、はつらつとした姿はたのもしいばかりです。しかし、子どもの数が減り高齢者が増える、いわゆる少子高齢化は確実に進んでおり、近い将来の最大の問題となってきています。

加茂地区に回覧されたものによると六月一日現在、加茂地区において十歳の子が四二人、年齢が下がるにしたがってこの数はどんどん減り、一歳の子たちは二三人しかいません。この数字が加茂地区全域においてということに愕然とします。

月出、白鳥、里見、富山、高滝の中学校が今の加茂中学校に統合された時には一学年六クラスあり、しかも一クラスあたり四〇人を超えていたことと照らし合わせると、いかに子どもが減ってしまったか思い知らされます。

ちょっと考えてみて下さい。一学年三〇人に満たないままに成人となり加茂地区に残るのはそのうちの何割くらいなのか。または残った人たちで結婚し子どもが生まれたとして、その学年の子どもは何人くらいなのか。その時に加茂地区の世帯数はどのくらいあるのか。どのくらいの町会が成立しているのか。消防団は加茂地区で一つ構成できるのか。どのくらいの空き家が生じているのか。荒れてしまう田畑はいったいどのくらいになるのか。

他から人が入ってこないことを前提にして過疎が極度に進んだと想定してみると、どういう事態になるのか。確実に近い将来起こりうるであろうことに対する対策は今まさに真剣に考えなければならないことです。

三つの記事

九月四日の千葉日報の県南版には加茂地区に関わる記事が三つも一度に載り、さながら「加茂特集」のようでした。その中の最大記事は「過疎対策に小中一貫校」と題されたものでした。富山、高滝、里見、白鳥の四小学校を加茂中学校に併設するというもので「同市教育総務部は、加茂地区の児童、生徒の減少が急激なペースで進むことから加茂地区への小、中一貫校の開設を第一候補として開設へ向けた検討を本格化させた」また市の教育委員会は「校舎の改修など実施計画を作成して三、四年後をめどに一貫校を開設したい」としています。

残り二つの記事の一つは「市民病院を診療所に」というものでした。先にも指摘したように既に病院としての体を成していない市民病院が十一月一日から名実共に診療所となり、入院ベッドの無い無床診療所となり、医師、看護士、職員も十八人から十二人になります。外科医はいないままで、救急の体制もなく、入院もできません。ますます高齢化が進み、足となるものを持たない独り住まいの老人にとっては深刻な問題です。

もう一つの記事は本郷地区に二〇一〇年をめどに完成する運動広場に隣接して地域の特産品などを販売する産業振興施設の設置の要望に関してのものでした。運動広場隣接地一万平方メートルに観光物産直売所や農産物加工所など集客施設を建設するという構想です。しかし、現段階ではこのことに関して市の方は慎重姿勢です。

二つの記事

話は逸れますが、他にも九月には注目すべき記事が二つありました。

一つは子どもたちに関するものです。農林水産、文部科学、総務の三省がすべての小学生を対象に農山漁村で長期宿泊体験をすることを目指す「子ども農山漁村交流プロジェクト」を始めると発表したことです。宿泊体験は一週間程度。高学年の児童が民宿や農家に泊まり、体験に行く時期に応じて田植えや稲刈りなど実際の農作業を体験するというものです。農山漁村の学校も、農村から山村、漁村へ行くなど、環境の違う所に行って体験を実施するとのこと。

これは来年から四七〇のモデル校で実施し、五年後には全国の公立小学校のすべてで実施されるようになるといいます。この加茂地区にも都市部の子どもたちが農業体験合宿のような形でやってくることになり、加茂の子どもたちはおそらく漁村に行くことになるのではないでしょうか。

これはとてもいいことだと思います。何よりも食の原点に直接関わるということ、そして校舎を離れた所で農作業などの労働の実体験をすること、この二点だけでも何物にも代え難い学習となると思います。農業体験した都市部の子どもたちが将来農業を目指したり、またこの加茂の地に移り住むようになる可能性もあります。

もう一つの記事はまさに朗報です。

認知症は現段階で直らない病気として最もやっかいなもののひとつですが、その認知症の代表的な病気であるアルツハイマー病が、飲むワクチンで直る時代が目の前に迫ってきたというニュースでした。アルツハイマー病患者に共通してみられるのはシミのような老人斑ですが、その主成分は神経細胞を殺すタンパク質です。これが脳に蓄積して固まりとなると神経細胞が次々と死んで記憶障害が起こります。治療の焦点はこの老人斑をいかに減らすかということでした。十年前に毒性の無いウイルスや細菌を注射して免疫反応を起こして抗体を作るワクチンと同じ手法が、アルツハイマー病の治療にも通用することが明らかになりました。その後の様々な研究の末、マウス実験では老人斑は著しく減り、老齢の猿でも老人斑が減って、いずれの場合も副作用は起きなかったということです。

永く研究を続けこのことを学会で発表したのは日本人で田平さんという方です。

進行を止めるのではなく、認知機能がよくなるという点がすごい所です。実用化には臨床試験などまだまだ超えなければいけないハードルがあるということですが早く実用化してほしいものです。また食べるワクチンとして抗体を作るような稲の栽培も進んでいて、将来ご飯を食べてアルツハイマー病を直すことを目指しているという記事も載っていました。

高齢者の多い加茂地区では身近な所で認知症の人を見かけます。独り住まいの老人が認知症になった場合などは本当に痛ましいものです。その人間の実際の認知の機能を奪うだけでなく、その人間から人格や尊厳といった本当に大切なものを奪ってしまうのですから、こんなにやりきれない病気もありません。多くの人がワクチンの早期の実用化を願ってやまないでしょう。

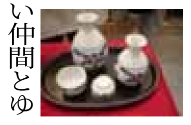
安心できるスローライフを

加茂地区の過疎の問題はそのまま日本の各地域の過疎の問題です。若者が減りお年寄りと子どもたちだけという構図が、子どもたちもあまり見かけないようになりお年寄りだけという構図になりつつあります。

前にも述べたことがありますが、この加茂地区はそれでもまだいい方だと思います。しかし、いつまでも今の状態のままではないので、まだいい方の段階で次のことを考えておかなければいずれ差し迫った事態がやってきます。気持ちにゆとりを持った安心できるスローな老後生活を送る為にも、私たちも含めていずれ老人となるであろう世代が本気になって地域のことを考えていかなければならない所にきています。魅力ある地域や活力のある地域というのは行政がやってくれるのではなく、そこに住む住民が作り出すものだと思います。

おいしいままに

日本酒のおいしい季節となりました。虫の声でも聞きながら秋の夜長にいい仲間とゆるやかにおいしい酒と肴を堪能するというのは楽しみなことの一つです。年をとってもおいしいものをおいしいとあたりまえに感じられるような健康と心のゆとりをもっていたいものです。



（征矢里山通信員）

がんばれ！青年団

養老西和会

養老西原地区に西和会が発足して今年で二四年目を迎えました。発足当時は高滝ダムの建設により、西原地区（小佐貫地区）は移転を余儀なくされ、番後台に住居を移し、新たな家並みを築いている最中であった。この地を離れる者もいた中である種の危機感を抱き、当時、青年真っ盛りだった数名が中心となり結成したそうです。地区内の親睦を図り、地域に少しでも貢献できたらいいなという想いであったと聞いています。反面、堅苦しい会にはしたくないという事で会則等は定めず、特に目的意識も持たない、出来る時に出来る活動をしようとのポリシーを持って、今まで会は運営されてきました。

現在、根本章夫会長の下、会員数一六名で構成されています。わが会も過疎化の中で若い世代の補充が殆んどなく年々、高齢化の一途をたどっているのが現状です。ちなみに一番若い会員で四〇代半ば、年長は六〇代半ばと年齢的には中高年の会でありますが、皆、それぞれに地域を想い、また遊び心を持って会を盛り上げていこうと考えています。

毎年四月に定例会を開き、その年の活動を皆で話し合うようにしています。毎年恒例の新年会、時には忘年会、旅行を計画したり、ゴミステーションを造ったり、ペンキ塗りをしたり、地区内の見通しの悪い道路の曲がり角にカーブミラーを設置したりとその時々に必要な活動を負担にならない程度に計画しています。今まで行なってきた活動は、対外的に胸をはれるような大きな活動ではありませんが、地域の和やかな雰囲気が保たれているのは、このような積み重ねの効果ではないかと思います。

もう一つ、ここ数年続けている行事として春に花見会を催しています。当地区の集会所横にある農村公園には、桜の木が数本あり、毎年見事な花を咲かせてくれます。その下で若草会（西原の女性の会）に協力してもらい、朝からバーベキューの準備をし、西原地区の子供から年寄りまで声をかけ、楽しい一日を過ごしてもらえるよう始めたものです。今後とも地域の和を大切に、楽しく活動していきたいと思っています。

（養老西和会　松澤　馨）

加茂の教育

どうなる五年後

平成２４年度の小学生

学年	高　滝	富　山	里　見	白　鳥	合　計
1	11	3	6	3	23
2	10	3	5	9	27
3	9	8	7	9	33
4	13	4	5	7	29
5	12	3	10	6	31
6	12	7	10	5	34

少しショッキングな数字をご覧ください。表は平成２４年度の加茂地区内４小学校の児童の数です。今の一歳児が小学校に上がる５年後ですので子供の数は確定しています。少子化もここまで来たのかというところでしょうか。

富山小は現在、複式学級となっていますが５年後は里見、白鳥でも複式学級となります。高滝小でも複式はギリギリ免れるだけで、全校で６７人の小規模校となってしまいます。

小規模学級は先生の目が子供ひとりひとりに行き届くという利点はありますが複式学級となると、違う学年を同じ時間で授業しますので単純にいえば先生が子供に向かう時間が半分しか取れなくなり、集中した授業が出来なくなることも考えられます。

そのほかの問題点として、子供の立場から考えると①同年齢層との意見交換の場が持てないため思考の深まりが浅い。②切磋琢磨する場が少なく子供の力を伸ばしきれない。③集団生活が希薄になり集団への適応がしにくくなる。などが上げられます。

また　学校運営から見ると①運動会や学芸会などの行事、クラブ活動などが限られ市の大会や発表会に人数が少なく参加できないことがある。②教職員の総数が減ることで一人の先生が多くの役目を担うことになり、学校運営に支障をきたす。などの懸念が生じます。

平成１８年度の町会長会ではこの問題を深刻に受け止め、今年度の町会長の皆さんや町会推薦の方、小中ＰＴＡ会長も加わって「加茂地区の小学校を統合して、小中一貫校を目指す会」が設立されました。

８月の末には、市原市学校規模適正化検討委員会でも「加茂地区では小中一貫校の開設が望ましい」との答申が出されています。

義務教育の９年間を一貫して教育すると先の諸問題が解消されるとともに、５年生くらいから、中学の授業のように、国語は国語、算数は算数の先生が教えることが出来るなど、教育の充実が図れるようになります。

また先鞭をつけた福島県郡山市立湖南小中学校では小学1年生を中学3年生が面倒をみたり、下級生の前では上級生が張り切りざるをえない様な状況が生まれ、幅広い世代で大変良い教育環境が生まれているそうです。

学校は地域文化の拠点であり、自分たちの母校という心の支えでもあります。しかし、学校の本来の目的は「子供の教育」のためにあるはずです。

加茂の地に「理想の学園」が誕生することを願い、地域の皆様のご理解を頂けますようお願いいたします。

（大曽根里山通信員）

楽器挫折者救済合宿in月出小

2007 体験レポート

通信員の合宿体験記

参加しました、月出小合宿に。企画から運営まで諸々を段取ったイベントですが、参加者の皆さんと3日間一緒に過ごすのはこれが初めてです。

さらに今年はシンガーソングライターの“種ともこさん”が特別講師として参加です。どんな合宿になりますか、皆の期待値は結構高いようです。

体育館で自己紹介、昼食のあとは早速バンド編成と課題曲が告げられ、個人練習にはいります。通信員の加わったバンドの課題曲は、なんと種さんの最新アルバムからタイトル曲の「おひさま」です。作曲者本人を目の前にしてその人の曲を演奏するなど、誰が予想したでしょうか。初日は曲の聴き込みと個人練習に費やされます。宿泊先の加茂城旅館に戻ってからは、風呂、夕食のあと大広間で練習、余興の仕込み、飲み会と思い思いに過ごす時間帯です。

種さん(右端)も交え記念撮影です

二日目。バンド練習が始まります。３階の音楽室がバンド練習場です。曲は頭に入っていても演奏となると話しは別です。自分の手元や色々なところから違った音が勝手なタイミングで聞こえてきます。こんなことでダイジョウブかっ！と思っていても、きりばやし講師の指導で、４回5回と合わせるうちに何となくそれらしくなってきて、各自の改善点も見えてきます。しかし、明日はゲネプロ【注】のあと１１時半から本番です。夕食もそこそこに練習場へ。熱心に練習を続けますが、９時・１０時となるにつれアルコールの血中濃度も高まってきます。「明日がありますから」と言っていた参加者に「じゃ味だけ見てよ」と渓谷ラベルの自然薯焼酎を渡して１５分後「もう一杯ください・・・」あとは酩酊状態へ。

三日目。最終日です。通信員は講師と一緒に会場へ先乗りしセッティングです。ゲネプロが始まります。キビシイ残暑の中ですが、流れる汗は確かに冷や汗です。あとは各自で最終チェックとなる頃、ギャラリーが集まってきました。

・・・そんなこんなで発表会も無事終わり、あとはお待ちかねのバーベキューです。加茂城さん角屋商店さんが用意してくれたバーベキューは味も量も文句なし。大きな銀杏の木陰で心ゆくまで楽しんでくれたようです。

最後に、種さんが歌ってくれたのは最新アルバム「おひさま」から“出町柳”と2作前のアルバムから、澄んだ高音が美しく響く“カナリヤ”の2曲でした。ヨカッタァ！

＊【注】ゲネプロ：【本番前の全体リハーサル】

（北　里山通信員）

加茂の車窓から

二つ目　車家健助

暑さも和らぎ、過ごし易い秋がやってきました。加茂の皆さんはどうお過ごしでしょうか？

ＴＶニュースでは、“景気回復バブル期以上”などと言っていますが、私的には、“どこが？”という感じなのですが、同感の方も多数いらっしゃると思います。

“破たんする会社”どころか、市町村が破たんしてしまっている中、どこをどう見ても、“好景気”など考えられないと思います。しかし、大半の方が“それは北海道で起きている出来事”と考えている方が、ほとんどではないでしょうか？

ところが、よく考えてみると“明日は我が身”の状況に、この加茂地区もなっていると思うのは私だけでしょうか？

私は生まれてからずっとこの養老渓谷で生活をしていますが、“当たり前”の様に、夏には“鮎釣り”“花火大会”、秋には“菊祭り”“紅葉狩り”など、私たちが何も考えなくても例年行事のように開催されていました。しかし今年は、花火大会中止、菊祭り中止、鮎全滅（病気の為）と、当たり前と思ってきた事が、当たり前でなくなってしまいました。ある意味“破たん”しているのです。

そんな中、少しずつですが、この加茂地区を何とかしようという方々が出てきています。大変嬉しい事なのですが、大半が年配者の方々なのです。そこで、何とかこの年配の方々に負けない様な若い団体を創ろうと計画中です。その名も“養老渓谷ボランティア団体、ふるさと『夢』くらぶ”です。活動内容などは、現在いる会員で企画中なのですが、近日中には会員募集をする予定です。年齢条件は、自分は若いと思っている方に限ります。ちなみに現会員１５名程で、平均年齢は３５歳くらいです。・・・参考までにです（笑）最終的には、会員５０名を目指して活動中です。本紙を愛読して下さっている方でも、ぜひ手伝って頂ける方がいらっしゃれば、遠慮なくご連絡ください。よろしくお願いします。

（小茶里山通信員）

市民病院その後

市民病院「診療所」へ

９月の市原市議会で国保市民病院が診療所へ移行する条例が可決された。これにより入院病床が無くなり外来診療だけの施設となったわけである。

これは全国的に問題となっている医師不足から来る結果であるが本当に残念な結果となってしまった。

現在は常勤の医者が内科医1名となってしまったため、この議会で組織変更の条例を成立させておかないと法律違反の病院になってしまい、保険診療施設の資格がなくなってしまう恐れがあったための処置である。

地域医療の中核を担ってきた市民病院を縮小してしまうことについては、議会の中でも様々な議論がありましたが「法律上致し方なし」という結論に至りました。

これから高齢化が益々進む地域にあって、介護や訪問診療を含めて地域医療のあり方の議論をまだまだ進めなくてはならないと思います。

少子高齢化の進む加茂地区の姿は　これからの日本が進む道なわけですから、ここで良い形で地域医療のあり方を実現することが他の地域にとっても重要なことになるはずです。

ひとつの形として、初期診療を担う地域診療所として機能を充実させ、本格的な検査や入院については設備の整った大きな病院へ優先的に引き受けてもらう体制が組めれば医療を受ける側としては今よりももっと安心な医療体制になるのではないかとも思えます。

現在個人的なレベルではありますが医療コンサルタントの方にも相談をしていますので行政や加茂の皆さんにも何らかの提言が出来るのではないかと考えています。

情報は小紙で発信していきますのでこれからも里山通信をお見のがし無く。

（大曽根里山通信員）

この地に在る限り
加茂地区民の支えに
なってほしい市民病院